

第10回連続講座『いのち』を考える ～遺族ケア・グリーフケア～ 講師プロフィール（敬称略）

日程	講師	プロフィール
1/29 (金)	<p>白山 宏人（しらやま ひろと） 医療法人拓海会大阪北ホームケアクリニック院長 在宅医</p> <p>【演題】 家族を支える「いのちのつながり」 ～家で過ごすということ～</p>	<p>大学で経済学を学ぶ学生であったが、医学部を目指す決意をして昭和62年夏に中退。進路変更の不安も友人の「ええんちゃう！」の言葉に後押しされ、翌年春に医学部入学。平成6年から急性期病院で呼吸器内科医師としての勤務、平成13年から在宅医療の世界に入り、現在大阪北部にて在宅医療に従事している。がん患者や神経難病、認知症患者の診療や看取りに多く関わり、在宅、病院、市民（患者を含む）の三つが地域の中で相互に支え合える体制作りを目指している。</p> <p>昭和62年8月 関西学院大学経済学部中退 昭和63年4月 兵庫医科大学入学 平成6年3月 兵庫医科大学卒業 平成6年5月 京都大学胸部疾患研究所・第1内科入局 平成7年6月 大阪府済生会中津病院呼吸器内科 勤務 平成13年4月 (医) 拓海会大阪北ホームケアクリニック勤務 平成14年4月 同院 院長</p>
2/5 (金)	<p>大河内 大博（おおこうち だいはく） 浄土宗願生寺副住職 上智大学グリーフケア研究所研究員</p> <p>【演題】 “また会える”を希望に生きる ～大切な人との絆～</p>	<p>昭和54年大阪市生まれ。平成14年から終末期のがん患者さんへの訪問活動、平成18年から死別の悲しみを分かち合うグリーフケア活動を開始。現在、市立川西病院、遺族会「ともしび」などで活動中。著書に『今、この身で生きる』（ワニブックス）、『グリーフケア入門』（勁草書房、共著）など。</p>
2/12 (金)	<p>坂口 幸弘（さかぐち ゆきひろ） 関西学院大学人間福祉学部人間科学科教授</p> <p>【演題】 グリーフケアのその先へ ～癒しきれぬ悲しみとともに～</p>	<p>大阪大学人間科学部卒業後、同大学院人間科学研究科博士課程修了、博士（人間科学）。現在、関西学院大学人間福祉学部人間科学科教授。専門は死生学、悲嘆学。死別後の悲嘆とグリーフケアをテーマに、主に心理学的な観点から研究・教育に携わる一方で、ホスピスや葬儀社などと連携してグリーフケアの実践活動も行っている。著書に『悲嘆学入門 - 死別の悲しみを学ぶ』（昭和堂）、『グリーフケア - 見送る人の悲しみを癒す - ～「ひだまりの会」の軌跡～』（毎日新聞社、共著）、『死別の悲しみに向き合う - グリーフケアとは何か』（講談社現代新書）など。</p>
2/19 (金)	<p>清水 新二（しみず しんじ） 奈良女子大学名誉教授 放送大学客員教授</p> <p>【演題】 “自死”～もう一つの寄り添いと「生きた証」～</p>	<p>昭和22年生まれ。東京都精神医学総合研究所研究員、大阪市立大学助教授、国立精神神経センター精神保健研究所成人精神保健部部长、奈良女子大学生活環境学部教授を歴任。この間、ハンガリー科学アカデミー、米国Beth Israel Medical Center、スイスベルン大学などで在外研究に従事。厚生労働省自殺未遂者・自殺者親族等のケアに関する検討会委員、人事院自殺防止専門家会議委員、大阪府自殺対策連絡協議会前座長、大阪市自殺防止対策部会長などを務める。『封印された死と自死遺族の社会的支援』（至文堂）など著書・論文多数。</p>
2/26 (金)	<p>坂下 裕子（さかした ひろこ） こども遺族の会「小さないのち」代表</p> <p>【演題】 支えあいと理解のまなざし</p>	<p>尼崎市出身。長女が突然の病気で亡くなったことをきっかけに、死別・悲嘆・子どものいのちにまつわるテーマに取り組んでいる。大阪音楽大学音楽学部卒業、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士後期課程修了。京都グリーフケア協会講師、こどものホスピスプロジェクト遺族支援チームリーダー、JR西日本あんしん社会財団理事。著書に『小さないのちとの約束』『天国のお友だち』（コモンズ）など。</p>
3/4 (金)	<p>柳田 邦男（やなぎだ くにお） ノンフィクション作家 評論家</p> <p>【演題】 かけがえのない学び ～「死を創る時代」の羅針盤～</p>	<p>昭和11年栃木県鹿沼市生まれ。昭和35年東京大学経済学部卒業、NHK記者に。昭和49年退職して作家活動に。災害・事故・公害や戦争、病気と医療、少年事件など現代における「いのちの危機」をテーマに取材・研究・執筆活動を続けている。最近では、震災と原発事故の問題、終末医療と「死生観」、被害者の精神史、核家族化とネット社会の進行による子どもの人格形成の危機の問題などに取り組んでいる。主な受賞に、昭和54年『ガン回廊の朝』で第1回講談社ノンフィクション賞、平成7年『犠牲(サクリファイス)わが息子・脳死の11日』とノンフィクションジャンルへの貢献で第43回菊池寛賞など多数。近著に『僕は9歳の時から死と向き合ってきた』『終わらない原発事故と「日本病」』（新潮社）、『新・がん50人の勇気』（文藝春秋）、『言葉が立ち上がる時』（平凡社）など。</p>